

# 中城湾港泡瀬地区環境監視委員会

## 第2回 委員会資料

<貝類等の発見に関する報道について>

平成15年7月29日

内閣府沖縄総合事務局開発建設部  
沖縄県土木建築部  
(財)港湾空間高度化環境研究センター

## 貝類等の発見に関する報道について

7月23日に泡瀬干潟生物多様性研究会が県庁記者クラブにて貝類等についての記者発表を行った件につきまして、事業者としての見解を以下に示します。

現地調査による発見

### 【貝類】

イソチドリ科：Leucotina sp. ニライカナイゴウナ（和名新称，山下）

2003年6月に当会の調査で、泡瀬干潟の北東部（第一期工事区域付近）低潮帯（＝潮間帯下部）から発見された。殻長約6mmの小型の巻貝。オーストラリアや中国大陸から近似種の報告があるが、日本から報告されているLeucotina属には該当する種がなく、日本新記録種である。種名の確定には詳細な検討が必要とされる。日本では泡瀬干潟以外では確認されていない。二枚貝タマキガイ科のソメワケグリ(Glycymerisreevei)に寄生する。タマキガイ科に寄生する貝類は日本では初めて確認された。

Leucotina属の種は貝類などに寄生すると考えられているが、その寄主が特定されたものは少なく、本種がソメワケグリに寄生することが確認されたことは、研究上大きな意義を持つ。オーストラリアの近似種Leucotina concinnaでも、寄生関係や生態に関する詳しい論文はない（Dr. W. F. Ponder, Australian Museum私信）。

Leucotina属の種が潮間帯に生息している場所自体が世界的にも極めて稀で、泡瀬干潟の生息地は非常に貴重である。また、イソチドリ科は巻貝の進化上においても重要な位置にある分類群である。以上のような理由で、本種の泡瀬干潟での生息は、科学的に非常に重要な意味を持っている。泡瀬干潟の第一期工事区域付近の極めて狭い範囲でしか生息が確認されおらず、工事の影響が懸念される。より詳細な調査と保全対策の検討が必要である。種の査定は堀成夫博士（萩市）による。

### 事業者見解

貝類については、従来より干潟生物生息状況調査を平成12年度より継続して実施しているが、本種は事業者においては確認されていない。

本種は、二枚貝ソメワケグリに寄生する微小な巻貝であるが、このソメワケグリは、沖縄沿岸のリーフ内や海草藻場内に多く見られ、また泡瀬地区においても比較的生息数が多く、従来から食用に採取されてきた二枚貝である。さらに、発見場所は潮間帯であり、その分布は、当面の工事計画区域近傍に限られた生息状況ではなく、本種の保存を考える上で、特段の対策を検討するには至らない状況にあると判断される。なお、干潟の環境（水質、底質、生息生物等）については、今後も継続してモニタリングを実施していくこととしている。

ツキガイ科：Monitilora simplex オボロヅキ（和名新称，名和）

2002年7月に、泡瀬干潟北東部から名和純氏（当会会員）によって極めて新鮮な合弁の殻1個体が発見された。オーストラリアなどに分布するが、日本からはこれまで報告のない日本新記録種である。現在の生息状況を把握する調査と保全対策の検討が必要である。

### 事業者見解

貝類については、従来より干潟生物生息状況調査を平成12年度より継続して実施しているが、本種は事業者においては確認されていない。

本種については、一例だけの新鮮な死殻の確認にとどまっているため、現段階では情報不足であり、生息の確認がなされたとは言い難く、本種の保存を考える上で、特段の対策を検討するには至らない状況にあると判断される。なお、干潟の環境（水質、底質、生息生物等）については、今後も継続してモニタリングを実施していくこととしている。

ソデボラ科：Strombus canarium turturella スイショウガイ

2003年6月に「泡瀬干潟を守る連絡会」の潜水調査で生息が確認された。本種は食用となる水産重要種であるが、沖縄本島では分布が衰退しており、羽地内海や大浦での生息が確認されているのみで、中城湾では絶滅したと考えられていた。泡瀬では第一期工事区域内の海草場（水深4-6m，ホソウミヒルモ生息地）から確認された。本種の生息は泡瀬の浅海生態系の健全さを示唆するものであり、詳細な調査と保全対策の検討が望まれる。

### 事業者見解

貝類については、従来より干潟生物生息状況調査を平成12年度より継続して実施しているが、本種は事業者においては確認されていない。

本種は、従来は食用に供される普通種であり、現状で生息数が減少している原因が本工事にあるとは考え難い状況にある。したがって、現段階では、本種の保存を考える上で、特段の対策を検討するには至らない状況にあると判断される。なお、干潟の環境（水質、底質、生息生物等）については、今後も継続してモニタリングを実施していくこととしている。

#### 【甲殻類】

ヤワラガニ科：Neorhynchoplax okinawaensis オキナワヤワラガニ（沖縄県レッドデータ仮称）

レッドデータブック評価：希少種（沖縄県レッドデータ）

2003年7月に成瀬貫氏（当会会員：琉球大学工学研究科院生）の調査で、泡瀬干潟から発見された。本種はこれまで、模式産地の沖縄県北部安波川での生息しか確認されていない。



泡瀬干潟は世界で2番目の生息地であり、非常に貴重である。詳細な生息状況の調査と保全対策の検討が必要である。

### 事業者見解

甲殻類については、従来より干潟生物生息状況調査やオカヤドカリ調査を平成12年度より継続して実施してきているが、本種は事業者においては確認されていない。

本種の生息地は、比較的陸岸に近い河口干潟の環境に類似した場所であり、オカヤドカリの生息環境に近いところと考えられる。オカヤドカリについては、汀線の埋立てを回避することにより生息環境を保全し、さらに人工海浜において生息環境を創造することとしていることから、現段階では、本種の保存を考える上で、更なる対策を検討するには至らない状況にあると判断される。なお、干潟の環境（水質、底質、生息生物等）やオカヤドカリの生息状況については、今後も継続してモニタリングを実施していくこととしている。

#### 文献調査からの指摘

##### 【甲殻類】

イワガニ科：Utica borneensis ヒラモクズガニ：希少種(沖縄県レッドデータ)

イワガニ科：Parapyxidognathus deianira トゲアシヒライソガニモドキ：希少種(沖縄県レッドデータ)，希少(WWFジャパンレッドデータ)

スナガニ科：Camptandrium sexdentatum ムツハアリアケガニ：絶滅寸前(WWFジャパンレッドデータ)

ヒラモクズガニ以下の3種は、内閣府沖縄総合事務局開発建設部・沖縄県土木建築部・(財)港湾空間高度化環境研究センター(2003)平成14年度中城湾港泡瀬地区環境監視・検討委員会 第3回委員会資料によって、泡瀬の比屋根湿地から確認された貴重種。ヒラモクズガニはこれまで、国内では石垣・西表でしか発見されておらず、沖縄島新記録である。しかし、総合事務局資料では、これらの種の貴重性や重要性が示されておらず、具体的な保全対策も検討されていない。これらの種は埋め立ての直接的な影響の少ない比屋根湿地で確認されているが、生活史の中で外海との繋がりを持っており、泡瀬干潟の大きな環境変化の影響を受ける可能性がある。

### 事業者見解

これらの甲殻類については、事業者の調査において確認されたものである。

事業者においては、ヒラモクズガニ及びトゲアシヒライソガニモドキについては、レッドデータ沖縄で希少種の扱いとされていることから、比屋根湿地の汽水生物調査を平成12年度より継続して実施し、その生息環境をモニタリングしているところ。また、ムツハアリアケガニについても生息環境が同様なため、併せてそのモニタリングがなされていると考えている。したがって、これらの種の保存を考える上で、更なる対策を検討するには至らない状況にあると判断される。

#### 【藻類】

イワヅタ科：Caulerpa sp. リュウキュウズタ（和名新称，新井・内村・羽生田）：  
新種．新井章吾(海藻研究所)・内村真之(NEDO)・羽生田岳昭(筑波大)準備中．分布，沖縄島  
中南部．2003年3月，日本藻類学会で発表された．泡瀬ではヒメウミヒルモ群落付近に生息，  
泡瀬干潟にも生息する新種であり，詳細な調査と保全対策の検討が望まれる．  
2003年3月，日本藻類学会発表要旨：「新井章吾\*・内村真之\*\*・羽生田岳昭\*\*\*：沖縄本島  
で発見されたイワヅタ属の1新種について」

われわれは，これまでに奄美大島，喜界島，徳之島，伊平屋島，沖縄本島，宮古島，石垣島，西表島においてイワヅタ属の採集を行ってきた．沖縄県中南部の数カ所から，新種と  
考えられるリュウキュウズタ（新称）を採集したので，形態と生育環境について報告する．  
藻体は匍匐枝と直立部からなり，匍匐枝は円柱状で表面は平滑で，直径約0.7mmあり，仮根  
糸を生ずる枝の長さは12～15mm直径0.4mmで，仮根糸は砂泥底表面の砂と小礫に付着する．  
直立部は薄く，無分岐であり，高さ20～27mm幅5mmあり，長さ約10mmの扁平な茎部を有して  
いる．羽枝は7～9対あり，長さ約4mm幅1.3mmで，平面的に互生またはやや対生している．本  
種は，糸満港沖側の水路，中城湾北中部，金武湾中部および大浦湾の水深8～20mの砂泥地に  
生育している．いずれの生育地も海水が清澄でありながら，地形的に静穏であり，砂面変動  
が生じにくい場所である．また，系統的位置関係を明らかにするために，分子系統解析を行  
っている．（\*海藻研，\*\*NEDO，\*\*\*筑波大）

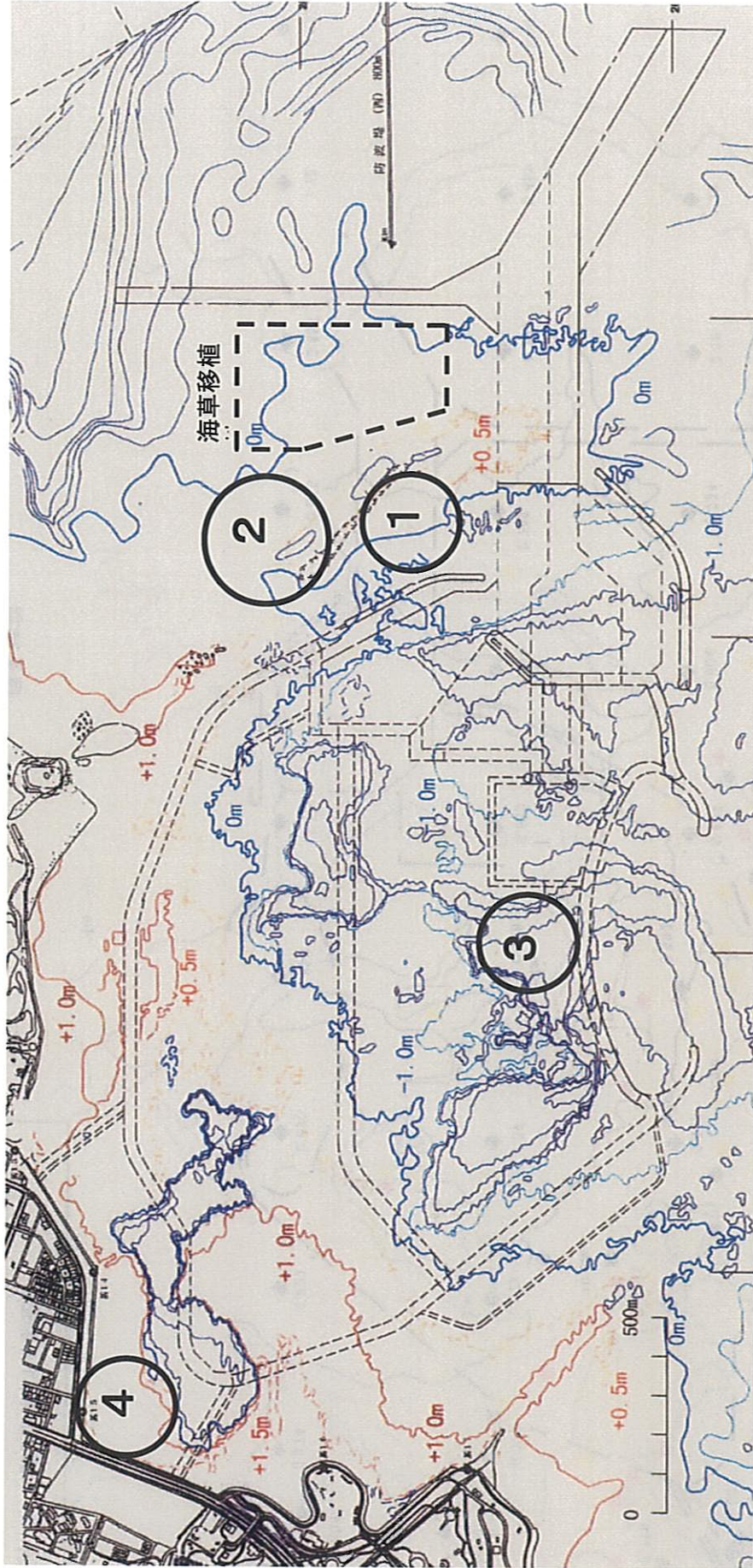
#### 事業者見解

事業者においては、海藻草類の分布調査を平成12年度より実施してきているが、本種は確認されていません。

本種については、RDBで絶滅危惧Ⅱ類のヒメウミヒルモと同所的な環境に生育するとみられる。このヒメウミヒルモの主生息地は埋立区域より深い海域であるため、当面、生息環境（水質）のモニタリングを行うとともに、生息確認を行っていく考えである。これにより、本種の生息環境についてもモニタリングがなされることとなり、現段階では、本種の保存を考える上で、更なる対策を検討するには至らない状況にあると判断される。



貝類等4種の沖総局想定発見箇所図



上の図は、以下の泡瀬干潟生物多样性研究会の山下氏の記述から事業者が想定した発見位置図です。

1. ニライカナイゴウナ：干潟北東部の大きな砂州の南西部(-6cmの低潮線付近)。第1工区の東端か、作業用航路に近いと考えられる。
2. オボロツキ：干潟北東部の大きな砂州の北部。海藻の移植実験が行われた場所付近。
3. スイショウガイ：「泡瀬干潟を守る連絡会」が6月にホソミヒルモを最初に確認した地点。
4. オキナワヤワラガニ：スーパー「サンエー」の前から海に出た場所。岸近くの干潟。